心の扉を開いたら

患者会・福祉団体便り

県手をつなぐ育成会理事長 田中　寛

特性に沿った支援を

16日、16団体の知的障がい者事業所交流会が沖縄市民体育館で開催され、約360人の老若男女の皆さんが精いっぱいに正装しダンスを楽しみました。羞恥心や体調不良で輪に入れず、壁際にたたずんでいる人や車いすの人たちも、足でリズムを取り笑顔で楽しんでいる姿は、見る者に幸せな気分を与えてくれました。

その様子を見ながら、ふと頭に浮かんだのは、7月に神奈川県で起こった悲惨な事件の知的障がい被害者のことでした。もし、あの事件さえなければ、今年も家族に囲まれて笑顔でクリスマスや正月を迎えることができたはずです。そして、突然、子どもやきょうだいを亡くされたご家族はどのような思いで年の瀬を過ごしているのでしょうか？

生活していく上で、思い出す必要のないことや忘れなければいけないこともたくさんありますが、どんなにつらくても絶対に忘れてはいけないことがあります。記憶を保存する私の小さな器は、飛び込んでくる新情報が入るたびに、以前の出来事があふれ出し、容疑者を憎む気持ちも心なしか薄れてきています。

過日、神奈川県より事件の検証委員会の報告が出ました。内容は大きく四つに分かれ①危機対応にあたっての考え方②関係機関との情報共有③社会福祉施設での安全管理体制④障がい者への偏見や差別的思考の排除―となっていました。危機への意識や情報管理、セキュリティーの強化や障がいのある人に対する差別意識排除は当然必要ですが、さらに大切なのは、異なる障がい特性に対する認識だと思っています。

2011年の東日本大震災で、NHKの調査によると、障害手帳保持者の被害率2・06%は、健常者の1・03%よりもはるかに多く、障がい者に対する避難体制の見直しが求められました。今年4月に発生した熊本地震でも、障がい特性である「こだわり感」が原因で、避難所に入ることができない障がいのある方の困難さが報じられていました。事故や災害は誰にも平等にあるものですが、その後の支援体制による困難さは決して平等ではありません。

障がいのある方への災害の影響は、命の危険性だけではなく、発生後の生活状況にも大きくかかります。障がいの特性に沿った協力や援助が必要なのはいうまでもありません。来年が良い年でありますように、祈念します。